

# 保育手帳から

東京府女師附屬幼稚園 卜 部 た み

歌子「先生、きのふ淋しかつたでせう。」

「……………」

歌子「歌子ちゃんがないでね。」

「ええ、どうなさつたの。」

歌子「歌子ちゃんねえ、お咳をひいたので休んだの

よ。」

「もうすつかりよくなりましたか」

歌子「もういゝの。」

「まあよかつたこと。」

是は缺席した幼児と翌朝下駄箱の前に迎へ出た私との問答で御座いました。「先生淋しかつたでせう。」 何といふ天真な挨拶でせう。

眞の子供を知り、本當の幼児を育てようと力める私共は、常に學者の教へを學ぶと同時に、絶えず幼児そのものから學ぶべきを一刻も忘れてならない事は申す迄ありません。どんな心理學書にも教育書にもあまり見られない實例や教訓は、子供と毎日を送る私共にも豊富に恵まれて居ります。

幼児の質問も記してみました。が、満四歳以後から入つてくる私共の園の子供は、比較的獨り合點の時期になつて居て、それ以前の家庭に於ける時代の方が面白い保育の時機であらうと思ふ事が度々御座います。

主に幼児の話、幼児相互の間答、幼児との對話に特に心を配つて居りますが、是に就ての考へ方は御承知の通り幼稚園雜草中「個人對話の教育價值」の項に於て、倉橋先生が心ゆくばかりにお教へ下さつてあります。

○

五月七日(食事中の間答) 隆夫(四年十ヶ月)

勝美(四年十ヶ月) 泰郎(四年十ヶ月)

寛(五ヶ年) 勉(五年一ヶ月)

牧一(四年六ヶ月)

(泰郎が机上にちかにパンを置いたので注意を與へた事から初まる)

泰郎「パンは机の上に置いてちやきたないよ。」

牧一「此の上(ふきん)に置けばきたないね。」

寛「お辨當だつてそうだよ。」

泰郎「ごはんはくつつくよ。」

牧一「机にはバイキンが居るんだよ。」

勉「水の中にも居るよ。」

勝美「居ないよ居ないよ。」

泰郎「居るかい。(勉にきく)」

勉「居るよ、けんぶ鏡をのぞいた時居たよ。」

隆夫「おちやとう(砂糖)の中には蟻が居るよ。」

寛「蟻は殺せばい、ちやあないか。」

牧一「蟻を殺しちやあいけないんだよ。」

此時他の子供の要求のたら餘義なくその先きを聞きもしましたが、それから蟻を殺すの可否に就て盛んに論じあつた様子で御座いました。幼児の觀察に就てもその考へ方に取扱ひに是等の間答から種々の暗示を與へられるので御座います。

○

五月廿九日(食事中の間答)

泰郎(四年十ヶ月) 勝美(四年十ヶ月)

泰郎「勝美さんのは赤いごはんだ。」

勝美「赤いごはんぢやあないよ、シヨウガが赤いん

だよ。」

泰郎「シヨウガが赤いから、ごはんが赤いんぢやあ  
ないか。」

勝美「そいぢや、シヨウガとごはんとおんなじにな  
つちやうよ。」

泰郎「シヨウガが赤いから、ごはんだつて赤くなる  
んだぜ。」

寛「あつ、あれさあちやん(貞夫)の畫なの、うま  
いね。」

○

此の時代の子供の奔放な奇想天外よりおつとい  
つた想像は、遊びに繪にお話によく現はれますが  
對話のうちにも亦現はれる事が多う御座います。

五月九日(十二年度の分から)(食事中の間答)

順一(四年二ヶ月) 澄子(五年)

愛子(四年五ヶ月) 貞子(四年四ヶ月)

其他

(女の子六七人の中に順一といふ男の子一人交つ  
て食卓につきました。)

澄子「女の仲間に男が一人。」(他の多勢も相和して  
よびはやす。)

貞子「あら男だつて毛を伸ばせば女になれるわよ。」

愛子「え、さうよ。順ちやんだつて毛を伸ばせばい  
いわねえ。」

順一「ああさうだよ、男だつて毛が長くなれば女に  
なるさ。僕だつて此の毛が(頭上に右手をの  
せる)長く長く伸びてさうと高く天までいく  
だらう。(頭上の手を高く上へ背のびし乍ら揚  
る)そうすると、あつちから飛行機がゴーツ  
て来て、ドーンと衝突するだらう。(頭上高く  
両手を打ち合せる。)そうするとドブーンつて  
海の中におつこつちやうよ。(両手を強く下へ  
おろしてお辨當をたべ初める。)

きいてゐた他の子達すまして箸を運ばせてゐま

す。暫くたつた後、

澄子「あらつ。さつき毛の話をしてゐたんだわねえ」

○

五月廿四日（食事中の問答）

貞夫「四年五ヶ月」 勝美「四年十ヶ月」

（同じ食卓の先生のお辨當を見て話し出す。）

勝美「先生のお辨當箱大きいね。」

貞夫「先生は大きいからよ。家の姉さんののも大きい

よ。お茶の水に行つて居るのは其れより大きい

だよ。」

勝美「どの位大きいの。」

貞夫「とても〜大きいの。」

勝美「此の位？（両手を一ぱいに擴げる）そいぢやあ

空の様に？」

貞夫「空一ぱいだよ。」

勝美「外に置かないと空の様だから家へつつかへち

やふよ。」

貞夫「學校に行かない時は洗つて手で空の方へははると、ボンと空の中へ入つちやふよ。」

勝美「人間でも入れるの、ふたがどの位大きいの。」

貞夫「日本中大きいの。」

次の問答は私と幼児との間にははされたもの。

幼児は大正十二年四月から十三年三月の間に出生の者。是等により家庭生活或は社會生活が幼い子等のあたまにどう映じてゐるか、うかがはれます

○

六月十二日（食事の時）（食卓を圍んだもの男八

名、女一名、私）

勉「先生、僕のお父さんはもうせん陸軍だつたの

僕陸軍よ。」

私「皆さんは、大きくなつたら偉くなるのでせう

ね。」君夫さんは。」

君夫「僕大將。」 勝「僕も陸軍。」

寛「僕は海軍よ。うちのおぢさん海軍ですよ。」

誠「僕お醫者様。」 貞夫「僕は運転手になるの。」

私「何の運転手？」 貞夫「貨物自動車の運転手よ。」

勝「秀子さんは女だから兵隊にならないねえ。」

寛「女はお嫁さんだね。」 秀子「ウム。お嫁さん。」

勝「ト部先生も女だからおよめさんでせう？」

私「……………男はお嫁さんにならないのね。」

誠「男はおむこさんですよ。」

夏生「僕は先生ね、飛行家よ。」

○

六月十四日(食事の時)(年齢前におなじ)

泰耶「先生、僕三輪車買ったから、うちは狭いけれ

ども見に来て下さいね。」

夏生「僕ももつてるよ。」得意げにいふ。他の子達の

顔色をみて。

私「お家で買つて下さるのはよいけれども、矢鱈

に人のまねしてあれ買つてよう等とおねだり

しないのがよい子ですね。」

勝美「でもね、うちのお父さんはとつてもお金持だ

から何でも買つてくれるので、僕いつも買つ

て貰ふ物を考へてゐるのよ。」

貞夫「うちぢやあとても貧乏だから、何にも買つて

もらはないの。」

私「あら、そんな事はないでせう。」

貞夫「僕は金持なんだけれ共、親の方が貧乏なの。」

私「うして親の方が貧乏といふ事がわかるの。」

貞夫「それはね、人が来てお金を拂ふでせう！そ

の時だん／＼少なくなつていくでせう。だか

ら貧乏なのよ。」

私「親つてどなたが貧乏なの。」

貞夫「お母さんよ。お母さんが随分貧乏で何もかつ

て下さらないの。」

私「あなたはお金持でそれをどこにしまつてある

の。」

貞夫「茶單筒の上にね、箱があるの。一錢ばかりよ

せんは郵便箱だつたけれ共今度木の箱なの。」

私「それは使はないの？」

貞夫「ためておいて大きくなつてから使ふのよ。」

私「何を買ふのでせう。」

夫「普通の靴よ。……雨の降らない時に穿く靴」

(後略)

六月十三日(食後)

新聞紙を片附けながら張作霖の事支那の戦亂の記事寫眞等があつたので

私「此の新聞は、戦争の事が澤山書いてあります

よ」

泰郎「先生ロシアとの戦争でせう。」

私「あかさうだね。先生ロシアでせう。」

私「いいえ。」

泰郎「うん。亞米利加だ。アメリカが日本に降参するんだよ。」

私「それはね、支那の國中のわからずやの人が居て、亂暴してよい人や日本人を困らせるから『およしなさい』といったの。それでもどうしてもやめないので日本の軍人さんが出かけて行つたのです。」

勝美「先生、戦争で支那の頸を切つてしまふのでせう。支那が日本人の手をちよつと位一兩手で一寸位の中を作つて）切つても、日本人は強

いから支那の頸をドンと切るわね。」  
私「戦争つて頸を切るものぢやあないんですよ。」  
官「僕知つてるよ。勳章もらふためにするんだよ」

